

宝石命名法に対して

7月20日開催の第11回JGS宝石シンポジウムの主題は『宝石の命名法・表記』についてですが、当協会ニーラム・アラウディーン副理事長がCIBJO（国際貴金属宝飾品連盟）色石委員会部会長として世界的に討議されている主題について皆様と共に考えたいと思い、その要点を5、6、7月の3ヵ月に亘りお知らせします。

その1

代々私たちの業界では、高品質のルビーとサファイアの色と品質を「ピジョンブラッド」と「ロイヤルブルー」という言葉を使い表現してきました。この言葉が表現するものは色だけでなく、同時にその石の優れた品質ゆえの希少価値を表現するために使用されました。とても主観的な表現なだけに、基準の合意に至っていないとしても、上質な色、品質そして希少性の三要素は欠かせられないはずでしょう。

ただし最近では、販売業者が、その宝石の販売促進を容易にするために、鑑別機関に上記の表現を用いた鑑別書の発行を依頼することがあります。第三者機関である鑑別機関の発行する鑑別書に上質な宝石の色を連想させる表現が記載されていると、消費者へ販売がし易いからです。それにより鑑別書の発行や鑑別の注文が増すのであれば、鑑別機関は当然のこととしてその傾向に従ってゆきます。業者にとって良い表記がされている鑑別書付きの宝石が販売し易く、そして鑑定機関は鑑別書発行量が増すとともに以前にまして売上と利益が向上する、この相互関係は業者と鑑別機関の両者にとって好都合な状況と捉えられるでしょう。

では一体、どの様な尺度や基準を持ってしてこの表現は生まれたのでしょうか？販売業者と鑑定機関の両者を含め我々業界全体は明確に答えられないでしょう。明確な答えが無いままに、我々は、非科学的で曖昧な昔からの言い伝えに基づき、各自の色と品質の物差しにあてながら様々な考えを巡らします。この物差しは、蛍光性の有無を品質の判断基準の一つとするような厳格な目盛りから単純に色合いだけを判断基準とする目盛りまでのとても長い物差しです。

この緩慢な状況下で起こる問題の源は、都合の良い言葉で宝石を表現することではなく、鑑別書上の表現方法（記載方法）の未標準化と相互理解の未調和だと思います。鑑別機関は様々な尺度で「ピジョンブラッド」と「ロイヤルブルー」を鑑別します。幅広い尺度で鑑別された「ピジョンブラッド」と「ロイヤルブルー」は今や希少性を失っています。

実は最大の問題は、消費者が標準化された表現を用いた鑑別書を受け取ったと信じていることです。特に過去3年間に世界各国で発行された鑑別書は数え切れないほど多く、消費者が別々の鑑別機関から異なる意見を記載した鑑別書を受け取ることから起こりうる問題は避けようがありません。返品が一旦発生

したら、この問題は大きくなる一方でしょう。

さて、このような状況は業界にとって好ましいのでしょうか？自由経済市場だからと言って、どの表現が正しいのか最終消費者の判断に委ねられるまで、現状維持のままで良いのでしょうか？それとも、我々業界人は業界保全のためにガイドラインを創出し、消費者からの我々の商品とサービスへの信頼を高めてゆくべきでしょうか？

その2

5月号のニュースレターに続き、宝石の色の表現（表示）についてお話しします。それももう少し詳しく、一步踏み込んで、鑑別書上の**表示（表現）**について述べます。

日本国内の主要鑑別機関により構成されている一般社団法人宝石鑑別団体協議会(AGL)は鑑別所の発行に関する規格（取り決め）を明確にしています。例えば、鑑別書上ではルビー・サファイアの呼称としてピジョンブラッドとロイヤルブルーは使用しない、と言う取り決めです。

私が理解する限りでは、その理由は、色石の品質評価を外形化してしまうような呼称に関して業界全体の規格（標準化）が設けられず、協調と調和が図られていないからです。AGLの見解としては、鑑別書は業界の歴史の中で培われた基準と研究と調査により立証できる事実のみを伝えるべきである、と言うものです。この見解に敬意を示すとともに、消費者が受け取る鑑別書には立証可能な事実と基準のみが明記されるべきことには賛成です。しかし、この規格はAGL 会員鑑別機関が日本国内で色の呼称を鑑別書に明記できないジレンマに陥る結果に結びついています。

前号にも述べたように、現在業界では鑑別書上で品質基準を満たしているかの如く宝石の呼称の使用を求める業者が存在し、その鑑別書を利用し市場の中で営業努力を続けています。宝石は鉱山で産出し、鉱山近辺の地域で研磨されている中、他国のほとんどの鑑別機関は業界の要求に歩調を合わせ前向きに色の呼称を鑑別書に書き加えています。繰り返しますが業界にはその色の呼称の科学的規格（根拠）が未だ存在しないため、海外の鑑別機関は自らの善意で独自の規格を生み出しています。現在の状況では鑑別機関同士による規格の相互理解と協調を結びにくく、消費者に手渡される鑑別書には独善的かつ様々な「ピジョンブラッド」「ロイヤルブルー」とは何かを謳う意見が記されている状況です。しかし、私たちは誰一人として科学的根拠を示すことができず、誰一人としてその表現は違うと指摘できずにいます。

全てが使われない場合もありますが、(a)色と色の濃淡、(b)透明度と不純物含有度、(c)蛍光性、(d)加熱か非加熱、(e)原産地、などが規格基準として使われています。

宝石の色を見て判断するだけでなく、その宝石の美しさと希少性を生み出す様々な要素をも鑑みなくてはなりません。振り返れば宝石の呼称が使われ始めた当初には科学的規格基準は存在していないので、今日誰一人として正解に導けると宣言する者もないのでしょう。ピジョンブラッドは久しく「感性の色（心で観ずる色）」と表されており、それは科学的に定義されたものではなく想像である、と思えます。

今、私たちが最も優先すべき顧客保護と業界の信用保全を鑑みた時、種々様々な鑑別書が発行される中、どのように問題解決に取り組むべきなのでしょう？消費者は鑑別書に表示された呼称は品質を表していると信じています。

我々が霧中の正解を探しあてている間、それら鑑別書が間違っているとは言えません。

しかし、正解を探し続けなくてはなりません。

結びに

「ピジョンブラッド」「ロイヤルブルー」と言った色の表記がされた鑑別書を手にする消費者の方々は、(a)「ピジョンブラッド」「ロイヤルブルー」は品質の表記である、(b)業界の規格として認められている、と誤っていらっしゃると思います。

しかし、業界ではこれら表記の相互理解または意思統一はされておらず、各鑑別機関は独自の基準の下に判断をしています。

ゆえに、業界内ではそのような宝石の販促強化の一環となるような表記を鑑別書上に求め、鑑別書なくしては価値と美しさを反映させた公正なプライシングができないことさえも起きるようになりました。

重ね重ね申し上げますが、この判断基準の正否はつけがたく、曖昧であるのですが、このまま放っておかず、解決または改善への糸口を掴む努力は惜しまずにすべきでしょう。

その一つとして、日本宝石協会は7月20日にこの重要な案件を議題とするシンポジウムを開催いたします。当日は、現在、国内および国際的に宝石の表記および呼称がどのような観点で捉えられているかプレゼンテーションを通し説明いたします。多数のサンプル石も用意いたしますので、実感による納得も得られるでしょう。また、意見交換の時間も十分に用意しました。業界を横断的にお集まり頂く多くの参加者の皆様の幅広い見解とご意見を交わしましょう。

見逃せられない機会です。一人でも多くの方にご参加頂き、貴重なご意見を頂けますようお願い申し上げます。

2016年7月

一般社団法人 日本宝石協会
副理事長 ニーラム・アラウディーン